保存

アイコンを追加　コメントを追加

トヨタ財団同窓会企画1泊2日ツアー実施レポート📝

市民参加の土壌をはぐくむ。地域の担い手探訪1泊2日ツアー📍静岡県浜松市〜掛川市

はじめに

2025年2月21日（金）から22日（土）の2日間、静岡県浜松市および掛川市で「市民参加の土壌をはぐくむ 1泊2日ツアー」を実施しました。このツアーは、地域活性化と持続可能な社会づくりを推進するため、市民参加の重要性を認識し、地域の担い手との交流を深めることを目的として実施しました。参加者は地域づくりに関心のある多様なバックグラウンドを持つ方々で構成されており、地域づくりに対する意識を共有する貴重な機会となりました。

Day1：2月21日(金)　浜松市視察

みかわや | コトバコ見学

最初に訪れたのは、浜松市尾張町にある、空き家をリノベーションした複合施設の「みかわや | コトバコ」。施設の管理人である大端将さんから、地域の活性化を目指したこの施設の取り組みについてお話を伺いました。食堂やカフェ、製本や野菜市など、異なる事業者が一堂に集まって運営されていて、当日も外で野菜市が行われていて、地域住民が野菜を買いに来る様子を見ることができました。

大端さんと参加者

¥300
トマト
¥300
¥190
軒下で売られていた野菜。地元農家さんから卸した野菜を販売している。冬限定で野菜市を開催することで、地域の方も毎年冬を楽しみにしているのだとか。

大端さんのお話からは、この施設で行われた多様な活動をご紹介いただき、この施設を拠点として、様々な人が集まっていることを垣間見ることができました。高齢の地域住民も、他地域から訪れた若い世代の観光客も、ファミリー層もそれぞれが密にコミュニケーションをとっているわけではないけれど、この施設で行われるイベントや展示、食事処が「なんとなく同じ場所にいる」という人の間のゆるやかなつながりをつくるきっかけになっていました。

また、「エリアリノベーション」という考え方をご紹介いただきました。”まちづくり”や”リノベーション”というと、多くは「建物単体をどう改善し、人を呼び込むか」ということを考えがちです。

しかし、大端さんの考える「エリアリノベーション」とは、建物単体ではなく、小さな変化を近いところでたくさん集積させることで、”点”ではなくて、”面”としてエリア全体でリノベーションを行うことだそうです。

午後には、そういった尾張町エリアで集積している施設を見学します。

まちに繰り出す前に一旦腹ごしらえ。みかわや | コトバコ内にある、お食事処KIZUKIのお食事をいただきました。

野菜のせいろ蒸し、塩麹からあげ、菜花のからし和えなどをいただきました。

KIZUKIの大村さんから料理の説明をいただきました。

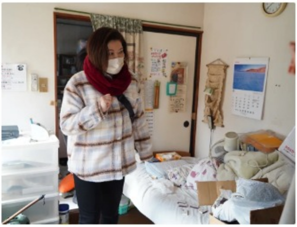
自己紹介などをしながらお食事を楽しみました。

尾張町エリア散策

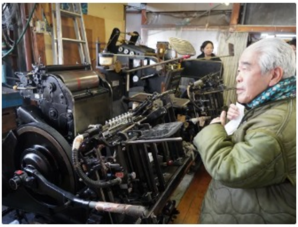
午後は、まちに変化をもたらしている、多くの拠点が集まるエリアを巡りました。

その拠点数は想像以上に多く、ひとつひとつじっくり見ている暇もないほど多くの場所がありました。既に店舗として営業している建物から、地域住民から買い取ったばかりで、生活されていた方の私物で溢れている状態の住居など、エリアリノベーションのリアルを見せていただきました。

瓦をコンセプトにしたカフェ「グラム」。内装からメニューまでとてもおしゃれで、昔から有名な老舗クリームソーダのレシピを受け継いで季節ごとに展開しているのだとか。


買い取ったばかりの建物。これから物を整理し、リノベーション作業を行うとのこと。

廃れていく商店街や、住む人がいなくなった住居などを、まだまだ資源として活用するために地域住民と協力しながら色々なコトを起こしている姿を垣間見ることができました。


老舗の印刷所にも伺いました。170年前に製造された印刷機。この機械を使える人がいなくならないように、コトバコの製本家が修行に行っているそう。

一時的に間借りして急遽BARと化す「まがりスナック」の開催場所となった時計屋さん。店主の女性が優しく出迎えてくれました。

Co-startup Space & Community FUSE 見学

次に訪れた「Co-startup Space & Community FUSE」は、浜松いわた信用金庫が運営するイノベーションハブで、起業家や地域活動家が集まる場所。施設内では、スタートアップに必要なリソースや支援が提供されており、実際の起業支援の現場を見ることができました。

FUSE
Co-startup Space & Community

二手に分かれて、施設内を案内いただきました。

3Dプリンターやレーザーカッターはもちろんのこと、木加工機まで…アイデアをリアルに、すぐ形にするための、最新デジタル造形ツールが揃えられていました。

目の前の利益ではなく、未来への投資として起業支援を行われているとのことで、さらにそれを地銀が行っていることの意義を感じることができました。

ゲストトーク：地域活性化の秘策

ゲストスピーカーの原田憲治さん（浜松フィルムコミッション）に、浜松市をロケ地として誘致するための取り組みについてお話をお伺いしました。特に、地域資源を活用したエンタメ業界へのアプローチや、地元協力を得るための工夫、実際に映画やドラマのロケ地として浜松が選ばれた事例が紹介され、地域活性化におけるエンタメの役割に関する新たな視点を得ることができました。

ゲストトーク：自分ゴトがあふれる街をつくるための仕掛け方

ゲストスピーカーの伊達 善隆さん（株式会社鳥善代表取締役・株式会社HACK共同代表）は、株式会社HACKが行っている様々な活動や、まちづくりを面白がりながら関係人口を増やす考え方について学びました。

自分ゴトがあふれる街を作る

HACK
YOURS INTO THE TOWN.

伊達 善隆と言います。

株式会社鳥善代表取締役
株式会社HACK共同創業

特に印象的だったのは「新川モール」と検索したときに表示される【公式ホームペジ！】という文字。「しなければいけない」というマインドではなく、面白がりながら、ときにはふざけながら楽しくよりよいまちを考えるマインドを学ぶことができました。

新 shinkawamall.com
https://www.shinkawamall.com ⋮

新川モール【公式ホームペジ！】

まちで暮らしながらも、もうちょっと農業や自然に関わってみたい。新川モールでできる気軽な園芸活動です。ゆるく、楽しく、園芸活動を通じて心をつなげます。

イベントカレンダー

新川モールは、浜松市はまちなかの居ていい場所です.

高架下ごはん 出店カレンダー

新川モールは、浜松市はまちなかの居ていい場所です.

会社概要

新川モールは、浜松市はまちなかの居ていい場所です.

お問い合わせ

新川モールは、浜松市はまちなかの居ていい場所です.

詳しくはこちら

日々の日常は浜松の都市郊外でサブ・アーバンパーマカルチャーをテー ...

shinkawamall.com のすべての検索結果を表示 »

伊達さんのお話の後には、新川モールと盆踊りの櫓に変身する「BON COFFEE」を視察しました。

高架下には動かせないものは設置できないとのこと。そのため、全てのものに車輪がついていて、動かせる仕様になっています。

盆踊りのときは櫓に変身。このコンテナにもタイヤが搭載されていて、YAMAHAの自転車で動かすことができるのだとか。

ゲストトーク：医療と地域の可能性

掛川で病院の医院長として地域活性化に取り組む宮地 紘樹さんをお招きし、宮地先生および東掛川病院の取り組みをお伺いしました。

地域住民を巻き込むために、ひまわりの種を配りそれぞれで育てたひまわりを回収してビールに。さらには電車を貸し切り、そのビールを電車内で飲めるというイベント。

ざつだん
癒やしの時間を創出し、病院をほっとできるスペースへ

カフェテラスへと一変した病院の入口。

高齢者も子どもも関係なく、ワクワクするイベントやホッとする場作りを実践されていた宮地先生。「健康のためには人とのつながりが必要である」という考え方のもと、様々な取り組みを通じて人々がつながるきっかけをたくさん作られていることが分かりました。

クロストーク

宮地先生、伊達さん、ロフトワーク棚橋を交えてクロストークを行いました。

クロストーク要点まとめ

掛川での仕掛け方の違い。
ぞれのユニークさ

新川モールの近くにあるオムサンドをつまみながら…

BON COFFEEのコーヒーもいただきました

- 浜松と掛川で人口やまちにある企業の数など、違いがある中でそれぞれの活動の違いやユニークなところは何ですか？（棚橋）
    - 掛川は規模が小さい分、広く人を巻き込むため、地域の特徴が出にくいと感じます。一方、浜松はエリアごとに中心人物が異なり、例えば「HACKなら新川モール」といった特徴が生まれやすいと思いますね。また、HACKには誰でも集まれる「新川モール」という場があり、それが強みになっている点は羨ましくも思います。（宮地先生）
    - 浜松は規模が大きく、合意形成が難しい面もあるが、HACKの強みは「企業と対話できていること」だと思います。地域の活動はリソース不足で続かないことが多いですが、HACKは企業と協力しながらその課題を解決しようとしています。また、どの地域でも「地域につなぐ人」「企画する人」「つくる人」が重要で、一人で全部やろうとするのではなく、仲間をつくることが大切だと思いますね。

トークテーマ①
浜松と掛

- 地域にないものを無理に持ってくるより、今あるものをうまく使うことが大事ですよね。仲間を集めて一緒に取り組むことも、その考え方のひとつですね。（棚橋）
  - 以前一緒に視察した、家賃3000円でアイスクリーム屋をやっているお店がいい例ですよね。人が少なすぎて、結果的に激安の好物件が生まれた。「なさすぎると、ある」っていう現象ですね。（伊達さん）
  - 以前棚橋さんと別件で視察した家賃3000円でアイスクリーム屋さんをやってるところなんていい例ですよね。「なさすぎるとある」という事例なんですけど、人が少なすぎて家賃が激安の好物件が出現したんですね。（伊達さん）
  - マイナスがプラスに転じたんですね。それって、市民参加にも通じる考え方だと思います。例えば伊達さんのやってらっしゃる「水ヨル」も、ハードルを上げすぎないことが大切ですよね。（棚橋）
  - 水ヨルは90回以上続けているんですが、僕らは「たくさん人を集めること」を目標にしていないんです。イベントって、どんどんクオリティを上げようとして、面白い人を呼んで、盛り上がるけど疲れてしまう…という繰り返しになりがちなので。だから、8回に1回くらいはどうでもいいテーマの会をやるんです。「白Tシャツについて語る」とか（笑）。そうすると、「あ、こんな話でもいいんだ」と思って、気軽に参加できるようになるんですよね。それを意図的に続けています。（伊達さん）

- 掛川百鬼夜行やTRPGの取り組みがありましたが、そういう今までにない新しい取り組みをする際い、浜松は「とりあえずやってみよう」という精神が結構あると思ったのですが、掛川はそのあたりの文化や雰囲気の土壌はいかがですか？（棚橋）

  - まずは「好きなことをやる」ことが大事ですね。夢中になれることなら、自然とエネルギーも湧いてきます。だから、最初に手をつけるなら、自分が楽しいと思えることがいいですね。（宮地先生）
  - また、100個やって3つ当たればいいくらいの感覚で取り組んでいます。「ちゃんと作らないと」と考えすぎると、いつまでも始められないので、「すぐやる」「まず形にする」を大事にしています。企業やCSRに関わる人と一緒にやると、資金面や信用面でもやりやすいですが、そのためには実績が必要です。だから、まずは少人数でもいいから始めることを意識しています。もちろん、失敗もたくさんありますね。（宮地先生）
  - まちづくりもビジネスも「多産多死」で、すべてが成功するわけじゃないんですよね。でも、たくさんやるからこそ、思いがけないヒットが生まれるんです。だから、最初から質を追求しすぎず、とにかく量をこなすことが大切です。（伊達さん）
  - イベントも「仲間づくりの場」と考えています。形にしたときに喜んでくれる人がいれば、自然と仲間が増えていく。自治体も同じで、まずは形にすることが大事ですね。もちろん、点で終わらせず、広がりを持たせる視点も必要ですが、「とりあえずやる」ことが何より重要だと思っています。（伊達さん）

- プロトタイピングと一口に言っても、その規模や方法が重要ですよね。大企業では簡単に試せないからこそ、水ヨルのように気軽に話せる場が企業にとっても価値があるのかもしれません。（棚橋）
  - そうですね。企業はすぐにお金を出すわけではないですが、話すだけなら気軽に参加してくれますし、物の提供もしてくれやすいです。そうやって一緒にやる機会を作ることで、関係性が生まれるのは大事ですね。（伊達さん）
  - 水ヨルには、役員や部長クラスの人も自然に来ています。アポイントを取るほどの話じゃないけど、ちょっと話したい…というときってありますよね。そういうときに、たまたま隣にいた人と気軽に話せる場があるのは、大切だと思います。（伊達さん）
- 最近、目的がなく来られる場所が減っていると感じるのですが、その点についてどう思いますか？（棚橋）
  - 僕がやっている「POTLUCK」は、本当に目的がなく、通りがかった人が「何やってるの？」と参加することもあります。目的があると似たような人が集まりがちですが、目的がないと多様な人が集まりやすいですね。ルールも少ないので、気軽さが魅力だと思います。集まりに一体感がありすぎると逆に入りにくいこともあるので、そういう意味でも「何となくいる」ことが許される場所は大事ですね。
- 目的を持たずにとりあえずやってみようとすることって意外と大事なのかもな、とお話を聞いてて思いました。（棚橋）
  - 水ヨルをやっていると「このイベントの目的は？」と聞かれることがありますが、僕たちは「目的は、ない！」と答えています。目的を決めると多様性が失われることもあるので、あえて何も設定しないんです。「どこに向かっているんですか？」と聞かれても、「どこにも向かっていません」と答えています。そういう場所があってもいいと思っていて、目的を設定しないことで、あえてそういう場所を作っているとも言えますね。

- 社会貢献とビジネスのバランスの取り方について、お伺いしたいんですけれども、お二方とも老舗企業の鳥善の代表だったり、病院の医院長という立場がある中で自主活動とのバランスの取り方はあるんでしょうか。（棚橋）
  - 鳥善は社員60人、アルバイト300人ほどの会社なので、収益がなければ成り立ちません。社会貢献は「街を良くしたい」という思いもありますが、成長戦略の一環として組み込んでいます。社会貢献をすることで会社の信用が高まり、同じ価値観を持つ人材やビジネスチャンスにつながるんです。（伊達さん）
  - 例えば、今新規事業としてベジタリアン向けのサービスを展開していますが、これは企業との接点が増えたことで生まれたものです。こうした活動が、結果的に会社の成長につながると考えています。（伊達さん）
  - 我々がやってることは元々社会貢献になっていて、収益の7〜8割は社会保障に支えられています。ただ、地域づくりに関しては全くお金が入ってこないので、基本的には病院の本業である「患者さんを診る」ことをしっかりやらなければなりません。（宮地先生）
  - でも、今は社会保障も厳しく、人手不足も深刻です。「どう持続可能な仕組みを作るか」を考えないと、地域も守れず、結果的に患者さんも減ってしまいます。そのため、社会貢献を投資と捉え、認知度向上や差別化につなげ、リクルートにも活かしています。（宮地先生）
  - 私立病院なので、潰れない保証はありません。最終的にはデータを示し、「社会保障を減らせるから、その分支援してほしい」と交渉したり、街づくりで社会保障の手当を得ることを目指しています。ただ、こうした長期的な投資は勇気がいるので、すべての病院が簡単に取り組めるわけではないのが現状ですね。（宮地先生）

- 企業の方が割とそういった地域貢献になるような投資を選んでいることが増えていると感じるのですが、企業の地域貢献に対しての理解度は上がってきているように感じますか？（棚橋）

    - おっしゃる通り、ここ数年で企業の地域貢献への考え方は大きく変わってきました。特にコロナ以降、企業のステークホルダーの一部に「社会」や「地域」が確実に含まれるようになったと感じます。（伊達さん）
    - 例えば、ヤマハ発動機は売上の90%以上が海外で、以前までは地域には全く興味がなかったんですが、最近は静岡県内にCMを打っています。それは、社員の家族に「お父さんやお母さんの会社を誇りに思ってもらう」ためです。地域の価値を高めることが、家族のロイヤリティや採用にも影響すると認識しているんですね。（伊達さん）
- 参加者の皆さんも企業をうまく巻き込めるともうちょっとやりやすくなる、という側面はきっとあるだろうなと考えていて、そのコツを伊達さんや宮地先生に引き出せたらと思ったんですが、いかがでしょうか。（棚橋）
    - まず大事なのは、企業の課題に寄り添うことですね。企業にとって重要なのは収益なので、コロナ以降は「地域課題の解決を新規事業にどうつなげるか」がテーマになっています。そこにどうアプローチできるかがポイントです。もう一つは採用です。経営者は「企業の価値と地域の価値を両方上げないと持続的な経営環境を作れない」と気づいています。浜松や掛川を県外の人からも魅力的な街にするための取り組みは、企業と一緒にできるはずです。（伊達さん）

市民参加の土壌をはくくむ

Day2：2月22日(土)　掛川市視察

バスで掛川市内へ向かいつつ、参加者の自己紹介を行いました。

朝食としてテイクアウトしたホットドッグ。

the Port kakegawa 見学

掛川市に移動し、最初に訪れたのは「the Port kakegawa」です。この施設は、宿泊、仕事、交流の3つの機能を持ったオープンイノベーション拠点で、地域活性化に向けたさまざまなプロジェクトが行われています。施設の運営者である長濱裕作さんからは、この拠点がどのように地域の若者や住民にインスピレーションを与え、社会課題解決に貢献しているかを紹介いただきました。

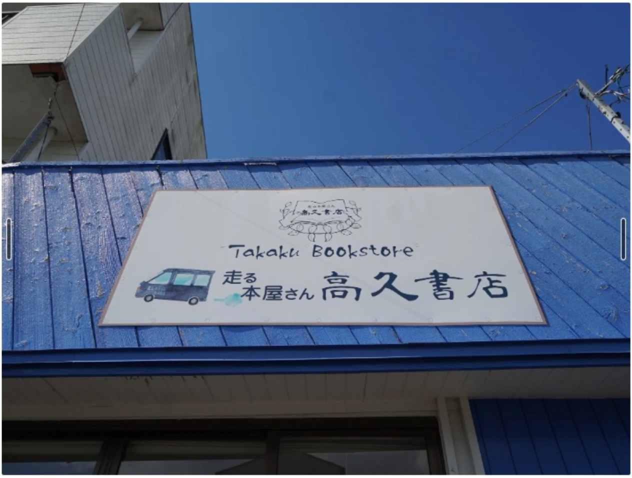
掛川市内まち歩き：カケガワビール醸造所

地元の食材を使ってクラフトビールを作っている、カケガワビール醸造所へ訪問しました。社長ともお話することができ、社長のビール愛がきっかけにクラフトビールを始めたお話や、ビールがあることで人が集まるようになっている仕組みについてお話を伺いました。

工場はとても小さな場所でしたが、これだけの敷地でも新しいことができるということを学ぶことができました。

掛川市内まち歩き：走る本屋さん高久書店

2020年2月にベテラン書店員の高木久直さんが開業した10坪に満たない独立系書店。また、書店勤めのかたわら、週末は書店のない地域に車で本を売りに行く「走る本屋」という活動をしています。



小さな書店ですが、書店に入ってすぐのところに赤本が並んでいたり、はたまたその隣にマンガが置いてあったり。（なんとマンガは立ち読みができるようにシュリンクが外してありました。）屋根裏に自習室があったり、駄菓子スペースがあったり。地域住民や学生が「目的もなく居て良い場所」をつくるための工夫が多く施されていました。

大人が選書したおすすめ文庫。自習室に来た学生は休憩がてら、大人のオススメ本を見て、世界を広げることができる。

駄菓子コーナー。

ゲストトーク：掛川で活動するキーマンたち

掛川で活動する4名の活動家を招聘し、それぞれの活動内容や行動指針をお伺いしました。

合同会社Brass Entertainment Company 代表
長濱 裕作
Nagahama　Yusaku
一般財団法人 未来を創る財団 事務局長
株式会社あらまほし 代表取締役
戸田 佑也
Toda　Yuya
株式会社クギヅケ 代表
/ 映像ディレクター
匂坂 秀樹
Sagisaka　Hideki
掛川市地域おこし協力隊
喜多村 純
Kitamura　Jun

▼2024年7月にクラウドファンディングを実施
御礼500万円達成!!!
3rd GOAL >>> 1,000冊の本を子どもに贈る
"ペイフォワードライブラリー"を完成させたい!
実現したかっ
①レジデンスメン
白い大人）を50
②ペイフォワー
リーの開設
③災害時のフ
ム機能を確保

長濱 裕作（ながはま ゆうさく）さん

合同会社Brass Entertainment Company 代表

「子どもたちが、好きなこと・やりたいことを体現している大人をたくさん見れる、会える環境をつくる」という理念を掲げ、かつて旅館だった場所の2階部分をリノベーションし、施設を創設。

大人たちが好きなことに全力になれる環境や土壌をつくる様々な活動をご紹介いただきました。

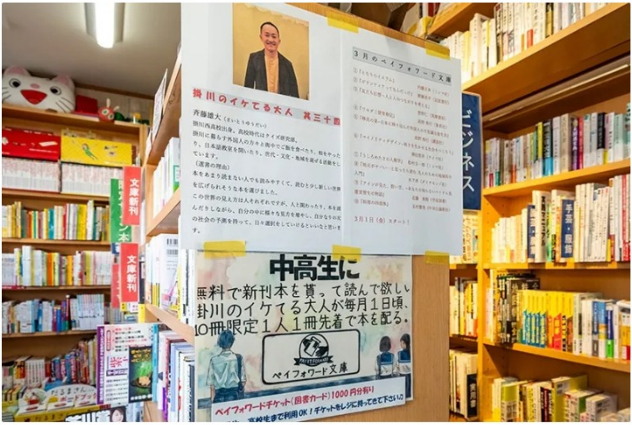
戸田 佑也（とだ ゆうや）さん

一般財団法人 未来を創る財団 事務局長、株式会社あらまほし 代表取締役

「テクノロジーの力でやさしい社会をつくる」を理念に、組織の人材育成やコミュニケーションなど、人にかかわる課題の解決に取り組んでいます。掛川観光協会掛川支部理事や掛川市公衆無線LAN推進協議会委員を務めるなど、地域の社会貢献活動にも積極的に参画しています。

高久書店店主の高木久直さんとカジュアルな雑談から、掛川の大人たちが次世代にペイフォワード（恩送り）していく試みとして、中高生に本をプレゼントするプロジェクト「ペイフォワード文庫」を行っています。

毎月1人の大人が、人生を変えた一冊や学生にオススメしたい本など計10冊を選んで購入し、中高生は読んでみたい本を選んで1人1冊無料で受け取ることができます。


掛川のイケてる大人　第三十回
斉藤雄大
3月のペイフォワード文庫
3月1日(金) スタート！
中高生に
無料で新刊本を貰って読んで欲しい
掛川のイケてる大人が毎月1日頃、
10冊限定１人１冊先着で本を配る。
PAY IT FORWARD
ペイフォワード文庫
ペイフォワードチケット(図書カード)1000円分有り
ビジネス
文庫新刊
手芸・服飾

高久書店でペイフォワードコーナーが設けられていました。

匂坂 秀樹（さぎさか ひでき）さん

株式会社クギヅケ 代表 / 映像ディレクター

掛川市内の企業と連携をし、「叫べる街、かけがわ」プロジェクトを主催

行っている活動のユニークさの秘訣は、楽しさドリブンで行っていることだと学ぶことができました。

喜多村 純（きたむら じゅん）さん

掛川市地域おこし協力隊

浜松と掛川では7倍も人口が違う中で、なぜわざわざ掛川を選び、移り住んでいるいるのか、という観点で掛川のユニークネスをご紹介いただきました。

ミニワーク（学んだこと・ネクストアクションの言語化）

最後にミニワークの時間を設け、参加者それぞれが学んだこと、このツアーを踏まえて「次にどう行動するのか？」を言語化し、共有しました。

参加者からは以下のような学びが言語化されました。

- 学びの言語化（一部）
    - まちづくりには「つなげる役」「企画する役」「つくる役」の3役が必要だということ
    - 地道にコツコツボトムアップで活動を行うことが大事
    - 質より量。水ヨルが良いモデルケース
    - ふざけてアソビをつくることで人を巻き込むことができる
    - 人はまちの財産であることを再認識した
    - 何もないことが何かにつながる（マイナスがプラスになることもある）
    - 毎月の月報やどんな想いで何をしているのかSNSやweb媒体で発信することが大切
    - 範囲を広げると伝えたいことが薄くなってしまうので、刺さる人だけに刺されば良いという考え方
    - 楽しむことが大前提
    - 面白がっている姿が伝染する
- ネクストアクションの言語化（一部）
    - ハッカソンメンバーで水ヨルのようなイベントをやりたい
    - Fab Laboを作りたい
    - 食べる、だべる、つながる食事
    - 自分が大切にしたい人とどんな関係を築きたいか言語化し、客観的に認識する
    - 薪利用を広めたい
    - 身近にあるもので自分で何かを解決する
    - 今やっていることの見える化。語れるストーリーを大切にする

執筆・松本（LW）